

深みが織りなす「まち空間」



コンセプト

ひとがまちをめぐる際、その視点場となるのは、歩行空間となる街路であり、街路の空間体験がゆたかなまちは歩いてのしいまちとなるであろう。空間体験がゆたかなまちを創出するには、街路の多様性が必要不可欠である。(整然とした街路のみで構成されたまちは魅力に欠ける。生活感ある裏通り等の混在がまちの魅力の一翼を担っている。)そして、それぞれ性格・趣が異なる街路が階層だつてつながることにより、全体として奥行き感が生まれ、「深み」のある街並みを形成することになる。

対象地区を見てみると、歴史的に重要な建築物が点在する旧奥州街道や中津川沿いのみならず、アーケード商店街、うらぶれた雰囲気を感じさせる裏まちなどがあり、街路の多様性はある程度感じられる構成となっているが、街路間のコントラストが曖昧である。また、街路網の核となる表通りに値する街路は見当たらない。そこで、対象地区内に、晴れやかな表通りを創出するとともに、最新の研究による情報量のコントロールという既存の整備にはあまり例のない概念を用いて、各街路の個性を引き立たせるしなげを施し、全体としてのまちの「深み」を創出した。

ふれあいの空間中津川

対象地は、水際空間、上流・下流への眺望、鮭やセキレイ等の生物、盛岡城の石垣風護岸等が存在し、現在でも十分魅力的であり、大々的に人間の手を加えるのは愚の骨頂であるが、いくつかの問題点解決のために以下の対策を要す。

- ・電力ビルによる圧迫感軽減のための移転と今後の高さ規制。
- ・河川空間への親しみを演出するため、付近の最小河川幅を侵さない範囲で、道路を一部河表側に拡張し散策スペースを確保。(写真-6)
- ・中の橋は、河積が少ないこと、上空空間の確保、橋と主対する盛岡銀行の対比を考慮し、3径間連続断面形式でリズム感・すっきり感を創出。
- ・与の字・上の橋は、風景にすっきり馴染んでおり、国の重要美術品、現行法では不可能なパイルベント工法等稀少であり、「ひびやかなボロ橋」のまま利用。
- ・一部河岸侵食箇所は、市役所裏の木組みに倣い、簡易で自然にやさしい手当てを行い、日常の散歩などに利用される高水敷を保護。
- ・「市民の川」との認識を深くするため、市民団体等による草刈・清掃を積極的に日頃から水際付近に近づけるような維持管理。
- ・「川」が主役たる催し(鮭祭りや薬物流しなど)を行い、川の存在感を発信。



・都市河川らしさ・盛岡城の石垣らしさを示している既存石垣を再利用する。
 ・中津川へのアプローチとなる階段の脇に、シダレヤナギのたもと木を植える。

ホットラインサカナナチョウ(図-3)

当地区は、近年リニューアルされて近代的なアーケードを設けた。しかしその構成を見ると、近代的なアーケードが現状の庶民的な店にふさわしいものではない。つまり、今ここで必要なのは、親しみを帯びる雑多な庶民的商店街である。近代的なものを求めるならば、大通り地区や今回の新バスセンターがある。

そこで、現在行われている店外への情報の流れ出しを更に強め、商業地区におけるR106の表空間、サカナナチョウの裏空間という明確なコントラストを出すことで、「深み」をも高めることを狙う。



旧奥州街道(写真-2,3,6,7,8,11)

歴史的な建築物が散在しており、街路全体の雰囲気やうまく形成されていない。よって、形態の規制・情報の抑制(歴史的な街路の雰囲気をつくりだすために、店外から店内の商品等が見えるような工夫をする。)等を行なうことによって、落ち着いた雰囲気の歴史性のある街路が形成され、既存の歴史的建築物もより生き生きとする。

また、街道筋の雰囲気を阻害している東北電力を撤去し、町屋型住居・公共施設等を配置することによって、街路景観が向上するだけでなく、中津川と街道がつながり回遊性も生まれ、人が集まりにぎわいが創出される。さらに、紺屋町警察署周辺から見やすくなり、この地区のランドマークとして再び機能する。

3つ目に、旧奥州街道北側において、若尾ビルがアイストップとなっており、歴史的な雰囲気が損なわれている。よって、対象地区内ではあるが正食普及会館を曳き戻し、新たなアイストップとする。

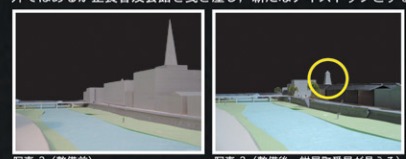


写真-2(整備前) 写真-3(整備後、紺屋町警察署が見える)

旧奥州街道裏(図-2)

生活感のある雑多な雰囲気は、計画してできるものではないので、点的な整備のみ(寺の境内におけるポケットパークの整備・電線の地中化)を行い、あえて手を加えずに残す部分も設けた。

R106周辺(晴れやかな表空間の創出)(写真-4,5,10,11)

現状は、片側1車線で交通量が多く、D/Hが小さいため少々窮屈な感じを受け、特徴のないどこにでもあるような街路空間となっている。そのため、対象地区の街路間のコントラストを最も曖昧にしてしまっている要因となっている。対象地区にはこの地区の街路網の核となる表通りは、バスセンターに人を集めることが必要となる。そこで、R106を核とする表通りの役割を担うべきであり、晴れやかな表空間となる演出を施した。

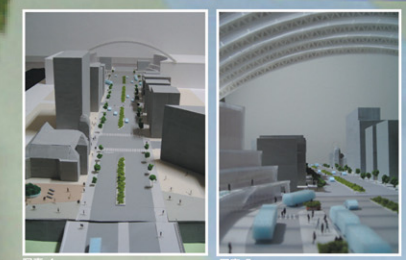


写真-4 写真-5

バスセンター(シンボルの創出)(写真-9,12,13)

バスセンターは、対象地区において、来訪者をはじめとする人々の玄関となる場所である。しかし、現状は老朽化も進み、対象地区の玄関というには実にお粗末なものである。対象地区の人の流れはバスセンターからの歩み出しにしろものがほとんどであると考えられ、まずは、バスセンターに人を集めることが必要となる。そこで、R106をまたぐようにシンボルとなるゲートを意識したアーチを設け、そこから目にとまり、行ってみたいと思わせることをねらいとした。これは大きな構造物を設けることは賛否両論分かれるところではあるが、まちのシンボルを創出することは、観光スポットとなり、まちの活性化にも一役かうものとなると考えられる。

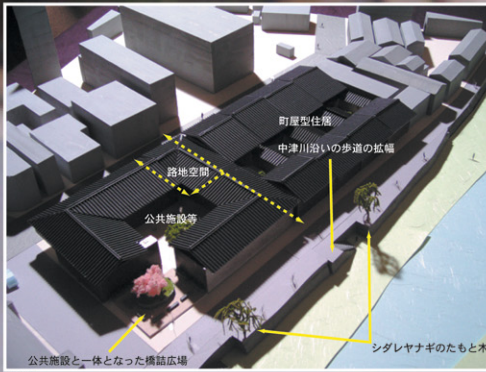


写真-6



写真-7,8



写真-9

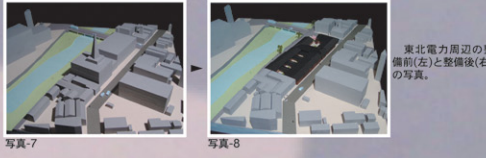


写真-10

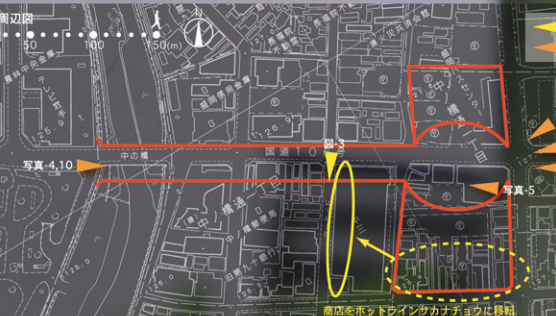


写真-11

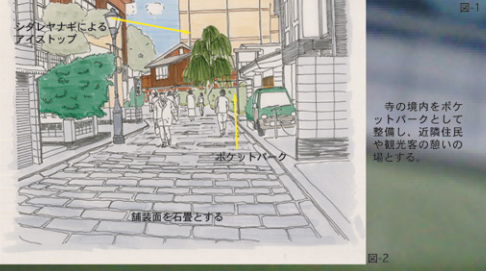


写真-12



写真-13

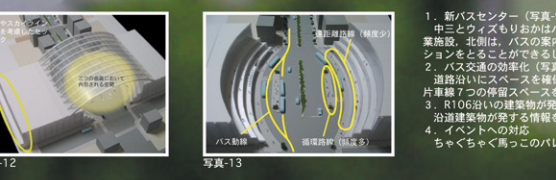


写真-14



写真-15



写真-16

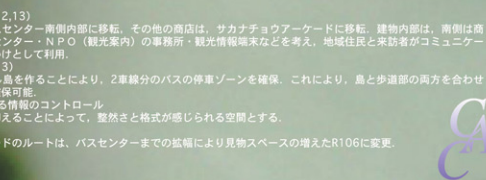


写真-17

1. 新バスセンター(写真-9,12,13)
 中三とウスもりおはバスセンター南側内部に移転。その他の商店は、サカナナチョウアーケードに移転。建物内部は、南側は商業施設、北側は、バスの案内センター・NPO(観光案内)の事務所・観光情報端末などを考え、地域住民と来訪者がコミュニケーションをとることができるようにして利用。
2. バス交通の効率化(写真-13)
 道路沿いのスペースを確保し員を伴うことにより、2車線のバスの停車ゾーンを確保。これにより、島と歩道部の両方を合わせ片車線7つの停留スペースを確保可能。
3. R106沿いの建築物が発する情報のコントロール
 沿道建築物が発する情報を抑えることによって、整然と格付が感じられる空間とする。
4. イベントへの対応
 ちかちかちか馬のハレードのルートは、バスセンターまでの拡張により見物スペースの増えたR106に変更。